

初めての文語文

一二三朋子

退職せしより二年を経ぬ。退職の後、してみたきこと五つありき。

梅干を作る、糠漬けを試みる、三十一文字に手を染むる、茶の道を聞く、此れなり。

右の四つは、ともかくにも実現せり。そして、最後は文語を身に着くることなり。文語の奥ゆかしき、雅びなる、格調の高き、名状しがたき趣に魅かれたればなり。

今やうやう、文語もどきを書き始めをり

文語を書くは、人に見するためにあらず。ただ、日本人として、文語を書くを得たらむには如何ほどの喜びならむかと夢想したればなり。

心の思ひを表すを得るに至らば、日記など、文語にて書かばやとこそは懂るれ。

さらに上達したらむ暁には、心ある友人への電郵にも用ゐたし。さすれば、友人も、半ばは苦笑ひを抑へ兼ねつつも、文語の魅力に目覚めなむ。

先日、学生時代の恩師より十二年ぶりに電郵を頂く。我、旧仮名遣ひにて返信せしところ、いたく喜び給ひぬ。今の時代、文語は新鮮なる響きを伴ふものなることを確信せり。

(令和四年二月七日受附)